狐の世界にとりっぷ！

眉クマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狐の世界にとりっぷ！

【Ｎコード】
Ｎ０４８９ＢＡ

【作者名】
眉クマ

【あらすじ】
夕花様の【動物の世界にとりっぷ！】シリーズに参加させて頂きたいと前々から思っており、図々しいのですがさせて頂きました。世界観が・・・・と思う方もいらっしゃると思いますが、心広く見て頂ければ幸いです。

壱（前書き）

夕花様の【動物の世界にとりっぷ！】シリーズに参加させて頂きたいと前々から思っており、図々しいのですがさせて頂きました。
世界観が・・・・と思う方もいらっしゃると思いますが、心広く見て頂ければ幸いです。

壱

拝啓
お父さん、お母さん、お元気ですか？
突然いなくなってしまった私のことを心配なさっておいでだと思います。
心配しないで下さいと言いたいのですが、言葉も伝えるすべがありません。
けれど、送るあてのない手紙を今書いています。
私は元気です。
この言葉だけでもどうか届きますように。

見上げると湿った生温かな鼻とひくひくと揺れる金色の髭。
頭に乗った生き物をむんずと掴むと私は顔に近づけ頬ずりをする。
あぁ、なんて柔らかいんだろう。
金色の美しい柔らかな毛並を頬で十分堪能すると私は、ひょいと目線までその生き物を持ち銀色のきらきらとした大きな瞳が私を映し出す。
「もう、終いか？」
「もっとぎゅっとしたい・・・・」
ぴくりと大きな耳が上がりふさふさの尻尾はふりふりと揺れた。
「けど、そろそろ休憩が終わるので駄目、駄目。ヤコウ様も、そろそろお勉強のお時間ですよね？」
大きな耳がだらりと下がり尻尾は動くのをぴたりと止めた。
目の前にいるしゅんと項垂れる生き物はまさしく狐の子供だった。
でも、人間はこの世界にはいないんだって。時折この世界に落ちて

くる人を落人っていうらしい。
「余はサキとぎゅっとしていたい――――何故、サキは余に夢中にならぬのじゃ？余にはそんなに魅力がないか？」
そんな不埒なことを言われましても・・・・・
狐の一族に求められるのは美しさを纏い他者を圧倒することが出来るほどの魅力だ。
ヤコウ様は、身分の高い弧族の生まれでしかもその弧族の中でも美しさは1、2位を争う。
私はこの狐を主人とし侍女として働いている。
答えない私にヤコウ様は、興味を削がれたのかもうよいと私の顔をそのおみ足で蹴ると宙を舞いとんと地面に降りられる。
そして、いつの間にか目の前には、金色の髪の綺麗な顔立ちをした少年がいた。
「余の侍女のくせに生意気じゃ！可愛げというものが全くない！」
じろりと不服そうに睨みつけるのは銀色のガラス玉。可愛げを求められましてもそんなものは持ち合わせていませんと答えると彼ご愛用の扇子を顔に投げつけられる。ひょいと上手に躱してみせるとふんとそっぽを向いて踵を返して歩き始めた。
齢15になられたヤコウ様はどうやらお年頃らしい。

弐

「サキは偉いよ」
侍女仲間のお香がよいしょと薪を背負いながら言った。
「ヤコウ様は酷い癇癪持ちだから半年ともった侍女はいなかったね」
確かにお香の主人であるカンナリ様は、侍女が何十人もいるのに対してヤコウ様には私しかいない。
「清めの時間もヤコウ様ってそりゃあ長いんだろ？清め勤めの巫女婆様たちもそりゃあ骨が折れるっていってたよ」
狐族は、風呂がとても好きだ。私も好きだけれど彼らにはとても適わない。ヤコウ様は、確かに他のものより長く入浴をしている。湯を温める薪の量は半端なく使うし、薪を運ぶ体力のない私はぐったりと疲れてしまう。
「頑張れるのはいつも、香が手伝ってくれるからだよ」
私がいうとお香は照れ臭そうに首を傾げえへへと笑った。
「サキの作ってくれた服みんなに評判でさぁ」
「あぁ、あの青空色の綺麗な衣？ワンピースにしただけだよぉ」
ヤコウ様がいらないと捨てた衣をいつも世話になっているお香のために、ワンピースに縫い直しプレゼントしたところこんなに変わった服は、見たこともないと大変喜ばれた。
まだ、布が余ってるし、今度は巾着でも作ろうかなぁ。きっと可愛い巾着が出来るだろうとにやにやとしていると、きゃあきゃあと侍女たちが騒ぎだした。
「カンナリ様だ」
お香が、頬を赤らめぼおっと湯あみ場の渡り廊下を見つめている。
美しい銀色の尾が七つ。尾と同じく肩に流した髪は、天の川のよう

に輝いている。
「顔もお美しいし、あの琥珀色の瞳で見つめられたら」
はあと溜息をつくお香は恋する乙女だ。清め勤めの巫女婆様たちも同じく、頬を赤らめはあと溜息をついている。
「う・・・うちのヤコウ様だって負けてないよ」
そう言ったが、サキの声は弱弱しかった。

ぐすり、すん・・・
ぐすり――――
どうして泣いてるんだろう？
目の前で男の子が蹲って泣いている。
ぐすり、すん。すん。
声をかけても顔も上げようとしない。なんだか、可愛そうだなぁ。
めんどくさがりの私は家の階段を飛越し、少年の元へと駆け寄ろうとした。
あれれ・・・
階段をたった3段飛び越しただけなのになんだろうこれは。
何だか奈落の下に落ちていくような。
「ひやあ」
着地に失敗した私は、可笑しな声をあげ尻餅をついてしまった。
驚いて顔を上げた少年は、とても悲しいめにあったのだろう。
腫れ上がった瞼からは、止めどなく新しい涙が流れているし、鼻からは鼻水が垂れている。
まぁ世に言うぐちゃぐちゃな状態なんだけども、それでも、とても整った顔立ちをしている。
綺麗なつややかな御髪、涙のせいで潤んだ瞳など、見たこともない綺麗な銀色の瞳だった。
二回ほど瞳を瞬くと少年は、涙を袖で拭きぴしりと背中を正した。
「何の用じゃ？」
先ほどまでとは正反対に、感情の無くなってしまったガラス玉のよ

うな瞳が私を見つめた。
えーと。私は頬をぼりぼりと掻く。ちらりと周りを見渡せばいつもの見慣れた風景はなく澄んだ流水が流れる川と、赤い鳥居が並んでいた。
ここは、どこでしょう？
とりあえず――――――――
「僕、大丈夫？」
少年は、また驚いたように瞳を瞬かせた。涙はもう出てはいないが頬には涙の跡がくっきり残っている。
余が怖くないのか？そう少年が聞いてきたので私は首を傾げた。
なんで？――――だって、あなた子供じゃない。
よくよく見てもとても綺麗な子供だと思う。でも、何故か少年は真っ白な着物を着ていた。
「そうか――可笑しな侍女じゃな・・・」
（あ・・・笑った）
私は、胸を撫で下ろした。
（でも、ここはどこだろう）
少年は泣き止んだけれど――――私は家に帰れなくなってしまった。
帰り方が分からない。
まるで、迷子の子供のようだ。

参

「カンナリ様は、尾が七尾あるのに対し、ヤコウ様は一尾しかないのじゃよ」
父君は、それは、お怒りになって。
「ヤコウ様は、御子ではないとおっしゃたのじゃ・・・・母君も亡くなり、あの方の酷い癇癪が始まったのはそのころじゃのー」
茶を啜りながら話す巫女婆様たちの隣で、私は侍女たちの衣を繕っているところだった。
ぽつりぽつりと、様々な話をする巫女婆様たちは生きる歴史だ。
様々なことを知っていて、よく肩もみのお礼にと私の質問に答えてくれる。
確かに言われてみればヤコウ様の尾は一尾のみ。
「尾は、狐族にとって重要なものじゃ。ヤコウ様のような身分の高い血筋の弧ならなおさらの」
ヤコウ様の住まいはカンナリ様やお父上と離れた場所にある。
笹の葉が生い茂るその住まいは、とても静かで私は気に入っているのだがヤコウ様はそうではないらしい。
襖は、びりびりに破かれ穴が開き、あらゆるものがひっくり返されている。
鮮やかな色の見事な衣が部屋中に散らばり、色の洪水の部屋の隅にそっとヤコウ様が寝息を立てて眠っていた。
ぷっくりとした頬には、涙の跡が出来ており、私はやっと彼の気持ちに気づいた。
我が儘を言ったり、癇癪を起したりするのはきっと自分を見てほしかったのだろう。

――――――余が怖くないのか？
叫んでも、叫んでも気づいてもらえない――――――段々と周りの者たちは自分を恐れて離れていく。
（お寂しかったのね、ヤコウ様）
「よし、決めた」
ヤコウ様のお父様をびっくりさせるような服を繕おう。
決意を新たにサキは部屋を出たが暫くすると部屋に戻り、取りあえず部屋の片づけから始めることにした。

尾が欲しいのなら尾に変わるものを。
銀色の美しい布を細かく裂いていき、まるで尾のように一つに繋ぎ合わせていく。
着物も巫女婆様たちに教わりながら、布から仕立て上げていく。
「で・・・出来た」
侍女の仕事もあったので寝るのを削っても、結局完成するのに1か月もかかってしまった。
（着ないって・・・言うかもしれない）
所詮、裁縫部出の素人が作ったものだ。デザインは、作った尾が可笑しくならないように、衣に巻きつけたり肩にかけたりしてお洒落に出来たと思う。
（自信作だけど・・・ヤコウ様が気に入らないっていうなら仕方ない）
ヤコウは、やっぱり日を改めようと思うぐらい今日も不機嫌だった。
「余のことなど、忘れておるかと思ったぞ」
声をかけてみればぷいとそっぽを向き、手に持っていた鞠をサキに向けて投げつけてきた。
私が、鞠を避けずにキャッチするとヤコウ様はつまらないのか地団駄を踏んだ。
サキは、そんな少年の様子にくすりと笑うと、小さなその手を握ってそっと引いた。

「ヤコウ様、こちらへ」
触るなと何故か顔を赤らめる少年を引き、サキは自分が作った衣を見せた。
少年は、目を大きく見開いて衣を見つめている。
「ヤコウ様のために作ったんですが・・・気に入らないのなら捨ててしまって結構です」
迷子の私を拾ってくれたお礼ですとサキは言った。ヤコウは、私を見つめると不機嫌な顔で言った。
「本当にお前は・・・面白い女子じゃの」
そして、初めて会った時のように少年はにっこりと笑んだ。

「お父上に進言するヤコウ様を見たのは初めてじゃ」
「カンナリ様と仲睦ましげにしている御姿は、まるで母君が生きておらっしゃった時のようじゃ」
にこにこと笑いあう巫女婆様たちの横を通り過ぎながら、今日も私はお香と薪を運ぶ。
「ヤコウ様が着ていた着物は、サキが作ったんだって？」
巫女婆様たちが言っていたとお香は、興奮気味に言った。
狐族の間で、サキの作ったあの着物は大人気となった。
尾がないコンプレックスはどの弧にもあったようだ。噂を聞きつけて私にも、主にも、夫にもと、サキのデザインした着物を作ってほしいと言う者たちが現れ始めた。
（ブランドでも立ち上げようかなぁ・・・）
最近そんなことを考えているが、ヤコウ様が余の侍女が生意気なと不満を言いそうだ。
ふと、ヤコウ様とカンナリ様が話しているのを見かけた。
「ヤコウ様も、ああ見るといい男になると思うんだよね」
ぽおっと少年を見て、頬を赤らめるお香にサキはそうでしょとにっこりと笑んだ。

拝啓
お母さん、お父さん。
私は元気です。
今日も、届くあてのない手紙を書いています。
最近の出来事をと思ったのですが――――この頃、一つ困ったことが起きてしまっています。

「サキ」
何度も何度も私の名を呼ぶヤコウ様は、あれから笑顔が多くなった。もともと美しかったヤコウ様が、一皮剥けたように大人の美しさを纏い成長し続けている。美しくて綺麗でかっこいいと思う私の自慢の主。
だのに。
ぎゅっと抱きしめて欲しいというおねだりはまだ続いているのです。
「狐になって下さい」
「いやだ」
前はヤコウ様が恥ずかしがって狐に変わっていたのに、どうしてか最近、人型でこの行為をしたがる。手を広げて期待の眼差しで、スタンバイし続けるヤコウ様。
仕方なくぎゅっと抱きしめると、あれと首を傾げる。頭一つ下だった少年の背は、今では同じぐらいで銀色の美しい瞳は私を捉えた。
意識してしまい顔が赤くなってしまう私を見てヤコウ様が耳元で呟いた。
「余は、もっとサキとぎゅっとしていたい。ずーーーとな」
そう言われ、なお一層顔を赤らめる私に、ヤコウ様は最近カンナリ様から身につけた艶のある笑みを向ける。
「大好きじゃ、サキ――お前がの」

拝啓
父さん、母さん。

何年後か経ち、ヤコウ様がもっと大きくなられたら耐えられる自信がありません。

とりあえず。

私は今、幸せです。

この言葉が、どうか異世界からあなたたちの元へ届きますように。

あなたたちの娘――――――――

サキより。

参（後書き）

お父上は九尾
カンナリ様は七尾
ヤコウ様は一尾
しっぽが少ないヤコウ様は、自分に自信がなかったんです。
でも、生きるためには尾っぽだけが重要なんじゃないと思ったヤコウ様は、見事非行少年から立ち直りました。
めでたし、めでたしです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0489ba/

狐の世界にとりっぷ！

2012年1月1日00時57分発行